

「スラム」概念をめぐる一考察

太田 麻希子

A Study on the Concept of 'slum'

OHTA Makiko

abstract

The purpose of this paper is an examination of the concept of 'slum' to explore its *problematique* as a preparation for a historic social analysis on discourses of 'squatter slums' in the Philippines.

First, the paper focuses on an emergence of 'urban slum problems' and regards its historical condition as the development of cities under capitalism. Secondly, it discusses features of cities as large and densely populated villages that need various kinds of powers to control and secure lives of the population inside. On the basis of this logic, considering discussions on Fordist cities, it is pointed out that welfare states secure a part of supplies of materials and services for maintaining the villages through investments in the spheres of reproduction to create obedient subjects as nations: labors: citizens. In this circumstance 'slum' is defined as a residential space which some subsistence requirements are not ensured by governments and markets in the capitalist society. It was recognized as the space for 'others' who were too immature to be modern subjects. Finally, it concludes that this category was constructed on the assumption that those who live there could be corrected and cured as the 'others' through powers of discipline in the period of Fordism.

Key words : city, discipline, Fordism, slum, power

はじめに

本稿の目的は「スラム」という概念の問題構成を明らかにすることである。筆者は現在、フィリピン・マニラ首都圏の「スクワッター・スラム¹の住民」が自らの生活空間を切り開き、維持再生産していくための諸実践を通じ、いかなる主体を立ち上げていっているのかという問題意識から現地調査を行ない、当事者の自己認識や居留意識について記述する作業を続けている。今後、調査研究の課題として、フィリピンの都市における「スクワッター・スラム」がいかに把握され、問題として構成されてきたのかということ明らかにせねばならない。なぜならこうした「社会問題」を捉えるための諸概念を構造化している問題構成の仕方は、アカデミズムのみならず、現実の「社会問題の解決」を意図した政策展開をはじめとする様々な諸実践の対象を「対象」として定義することで、当事者の主体形成や自己認識のありかたをも規定していく力を持つからである。

マニラ首都圏の「スクワッター・スラム」の居住闘争に関する研究としては、Berner [1998]、Karaos [1995]、Naerssen [2003] などがある。しかし、「都市貧困層」、「スクワッター」、「スラム住民」、「窮乏地域」(depressed area) といった語を一端括弧に入れることで、これらの概念が持つ自明性を問い直し、フィリピンの「都市問題」をめぐる諸言説においていかに語られてきたのかということに関しては一切議論されていないのが現状である。

キーワード：都市、規律訓練、フォードイズム、スラム、権力

*平成16年度生 比較社会文化学

今後フィリピン社会の文脈においてこうした範疇や関連概念をめぐる議論の盛衰をたどり整理していくことが不可欠と考えられるが、本稿ではまずその第一段階として「スラム」を取り上げる。

都市における劣悪な居住環境という意味を持つ語としては、「スラム」のほかに、「スクワッター・セトルメント」、「自然発生的集落」²、「窮乏地域」、あるいは「アーバン・プアー・コミュニティ」などがあり、国や地域によっても同様の状態を表すローカルな言葉が存在している。じっさいに「スラム」と位置づけられるところに住んでいる当事者からすれば、「スラム住民」などと積極的に名乗るといことはめったにないであろうし、政治的公正さの視点からすれば、こうした言葉を使うのは適切でないという議論もある。

若干ではあるが、筆者のフィールドであるフィリピンの状況について触れておこう。「スラム」という概念がフィリピンの都市研究において貧困や居住の問題を語る際に中心的な概念としてその役割を果たしていたのは、1960年代後半から1980年代にかけてのことである³。だが現在のフィリピンでは、「スラム」という語より、「スクワッター」、「窮乏地域」、当事者の運動においては「都市貧困層」といった「名乗り」の方が一般的と思われる。

まずここでは簡単に、「スクワッター」と「都市貧困層」という語を取り上げてみよう。「スクワッター」という概念は、開発途上国の都市研究の文脈においては、「自然発生的集落」「インフォーマル・セトルメント」という代替概念を生むほどまでに差別的な響きをもって捉えられる傾向がある。フィリピンにおいても1970年代にスクワッティングが犯罪化されたという経緯もあって、この呼称を避けようとする傾向がある。「都市貧困層」という語については、フィリピンにおいていつごろから定着したのかはさだかではないが、この語は「スクワッター」という「違法性」を想起させる名づけに対して、「貧しさ」を前面に打ち出した比較的新しい、運動側からの抵抗的要素を持った概念であるように見える。Karaosは、1970年代半ば以前には、「社会階級」としての「都市貧困層」は認知されておらず、都市政策の策定や政治に対する圧力団体として行動することもなかったと指摘している〔Karaos, 1995: 9〕。

いかに「名乗る」のか、すなわち自己をいかなる範疇をもって定義し、表象するのかという問題は当事者にとって運動戦略上ひじょうに重要な意味を持っている。しかしフィリピンにおける「都市貧困層の運動」は、事実上「スクワッター・スラム」という都市の定住空間の「周辺」に置かれている人々による、居住空間をめぐる闘争によって表象＝代表されている。したがって「スラム」、「スクワッター」、あるいは「窮乏地域」といった空間的な諸概念の検討を抜きにして「都市貧困層の運動」を語ることはできないと考える。

以上を踏まえ、ここでは「スラム」というカテゴリーを取り上げる。本稿は、この概念がフィリピンの「都市問題」を取り巻く諸言説においていかに立ち現れ、概念化され、そして他のカテゴリーにとって代われ消えていったのかという問題を明らかにするための第一段階にあたる作業であり、「スラム」概念が一般にいかなる問題を構成しているのかということ明らかにすることを目的とする⁴。

I. 「スラム問題」発生条件

一説によれば、英語の‘slum’とは、産業革命期のロンドンで誕生した流行語であり〔UN-HABITAT, 2003: 7〕、そもそもは「眠り、まどろみ」を意味する英語のslumberに由来しているという〔新津, 1989: 39〕。国連人間居住会議（以下UN-HABITAT）の報告書によれば、この流行語が誕生した19世紀はじめには、“a room of low repute”（評判の悪い部屋）、あるいは“low, unfrequented parts of the town”（卑しくて往来の少ない街の区域）を指していたという〔UN-HABITAT, 2003: 7〕。オックスフォード英語辞典をひくと、1825年にはすでに“slum”は「街の中にある人口過密地区で、低所得者や貧民が居住する街路や路地、団地のこと。多くが非常に込み合った地域や地区を形成し、その住宅や生活状況はむさ苦しくて惨めなのが特徴である」〔Murray, Simpson, Weiner, ed., 1989: 754〕というような、現在連想されるのに近い用法で用いられていることがわかる。

この語が誕生した時期と、19世紀という資本主義が著しく発展し始めた時期が同じであるのは、決して偶然ではない。世界で最初の産業革命を達成したイギリスでは多くの都市が劇的に発展した。工業生産の拠点としての都市は農村から大量の産業予備軍が流れ込んだことにより、深刻な住宅や都市基盤の不足に陥った。これらの人口はエンゲルスが綴ったように、低賃金で無権利という最悪の労働環境で働き、労働力再生産に必要な衣食住も欠乏状態に陥っていたことが知られている〔エンゲルス, 2000〕。

都市の貧民とその居住空間は外部に不利益をもたらさない限りは放置される傾向にあったが、局部的に集中した犯罪・悪徳・貧困・疾病などが、全体社会にまで危険を及ぼすと目されると、都市のもっとも危険な空間とみなされるようになる。特にコレラなどの伝染病が流行したさいにはその発生源とみられ、都市の行政官や科学者たちの強い関心をひいた。イギリスに遅れて産業革命が始まったアメリカでも、やはり都市貧民の居住区が問題化されるようになった。Wardによれば、19世紀前半、アメリカの都市の改革者たちは「伝染」というメタファーで「スラム」における悪徳の広がりを問題化し、使節団を派遣したりホスピスを設置して解決しようとした〔Ward, 1989〕。時代を経るにつれ彼らの関心は貧民の道徳から居住環境に、居住環境から経済的不平等へと焦点を変えていき、都市問題を表象するメタファーも医学のアナロジーから社会有機体論的なものへ変わっていったが〔*ibid*: 28, 128 - 135〕、いずれも本質的には対症療法的な、早急な問題解決を意図した実践科学的なものであった。やがて都市の「危険地帯」に対処するための制度的基盤が整えられていくにつれ、「スラム」は政策上の一般的操作概念として発祥の地であるイギリスのみならずその植民地にまで定着していったようである〔UN-HABITAT, 2003〕。「スラム」とは実体的には近代資本主義社会において成立する大量の人口を抱えた集落にのみ存在する特殊歴史的な現象であり、認識論的にいえば、当時の都市貧民をめぐる状況を社会問題と設定・解決するために練り上げられていった実践的概念であった。すなわち、「スラム」概念は何らかの適切な処置がとられることにより、この種の社会問題がいずれは消えて無くなるものであるという前提のもとに構成されていたのである。

II. 都市における「生」の〈支配〉と〈保障〉

新津によれば「スラム」は3つの側面から概念化されている。①劣悪な居住環境という物理的側面、住民の意識や行動様式といった②社会的側面、最後に③経済的貧困の問題〔新津, 1989〕。「スラム」とはこれら3つの側面において人間の生存を脅かすような「問題」あるいは「欠落」が認められる居住空間のことである。その定義は定義主体の置かれた立場や目的に応じて様々であるが、それらをひとつひとつ検討していくのではなく、ここではまず前章で指摘した「スラム問題」発生歴史的な条件である資本主義社会における都市というより大きな社会構造との関連において議論を進める。

ここで言う「都市」とは、ある時代のある社会の中で、相対的に人口の多い、人口密度の高い、住民の大多数が農林業以外の産業で生活の資を得ている大集落として定義される〔濱島、竹内、石川編、1992: 294〕。この大集落が崩壊することなく維持再生産されていくのは、そこに何らかの権力が存在しているからである。藤田は、権力は他者の人的・物的資源を動員することで人間の欲求を〈保障〉すると同時に、それらの資源を〈支配〉する機能を持つと指摘する。この論理からすると、狭い空間に集中した大人口からなる集落の存続は、家族や共同体よりもさらに大きな権力が、生存に必須の衣食住をはじめ、人々の持つ様々な欲求を〈保障〉することによって可能となる。都市は、人口の大半が非農林業に従事しており、食料をはじめとする人間生活を支えるに必要な基本的な生活資料の生産から遠ざかる空間である。そのため空間内部における大人口の「生」は、外部から様々な生活資料をもたらす供給する権力によって〈保障〉される。そしてこれはまた権力がその人口を〈支配〉しているということを意味しているのである〔藤田、1993〕。

ところで、資本主義下の都市においては、人間の欲求の充足は企業や金融機関といった市場領域の権力による〈保障〉への依存が拡大する。資本主義発展以降の都市に集中した未曾有の規模の人口は、「労働者」として権力の〈支配〉を受け入れることで所得を〈保障〉され、また「消費者」として市場に流通する様々な財・サービスを消費することによってその「生」、すなわち労働力の再生産を〈保障〉された。こうして都市における人間の生存保障はジェンダー分業に基づいた無償の労働力再生産の装置であり、そしてまた最小の権力単位である世帯を最後の砦として残しながらも、徐々に市場に依存するところが大きくなっていったのである。

19世紀の大工業の発展期、そして20世紀前半に始まり1970年代に終わりを告げる完全雇用、社会保障、大量生産・大量消費を前提とした蓄積体制であるフォーディズムの時代においては、大量の労働力を確保する必要性から「労働する存在」としての人間主体が誕生した。この時代を代表する主体は労働者（＝国民＝市民）であり、諸個人はフーコーの言う規律＝訓練によって育成されていた〔フーコー、1977〕。この時代の権力は日常生活の隅々

にまで毛細血管のように浸透していく性質を持つ。この種の権力による〈支配〉は表向き自由と平等をうたいながらも、身体や精神のありかたにおいて「正常」とされる規範にもとづき、あらかじめ制限され方向付けられた「欲求」を〈保障〉することで、諸個人を構造再生産に寄与するような従順な主体として形成する。

このような規律訓練型の権力は福祉国家による「労働者」に対する手厚い〈保障〉によって支えられた。1970年代の都市社会学において現れた、国家が再生産領域へと投資することによってその費用の一部を〈保障〉し、労使関係を安定させつつ、従順な労働者を生み出していく、社会的再生産の単位としての都市に関する議論は示唆的である〔カステル、1984〕。

しかし、当然ながら権力は都市に集まった無数の「生」のすべてを「生かす」わけではない。「スラム」が資本主義社会の都市において現れる人間の生存を脅かすような居住空間であるということを押さえると、「スラム」とは市場と国家による生存保障が著しく制限されている空間として位置づけることができる。それゆえ、「スラム」ではしばしば資本制領域外において生存保障を可能とするような様々な活動が観察されるのである。

規律訓練の権力は「労働」をその根本にすえながら、矯正されるべき無数の他者を生み出した。このような無数の他者と同様、「スラムとその住民」は、権力による治療と矯正を前提として生み出されたカテゴリーなのである。

Ⅲ. 他者の空間としての「スラム」

前章の冒頭で指摘したとおり、「スラム」とは①物理的側面、②社会的側面、③経済的側面という3つの側面において概念化された語である。これは単なる不良住宅区を意味するのではなく、住民の意識や行動、すなわち生活様式をも射程に入れているのである。

「スラム住民」に特有とされる生活様式に焦点をあてた研究の起源は、1920年代のシカゴ学派の人間生態学に溯ることができる。初期シカゴ学派の代表的エスノグラフィーである『ゴールド・コーストとスラム』〔ゾーボー、1997〕の中で、ゾーボーは「スラムは明らかに経済的現象以上のもの」〔ゾーボー、同掲書：172〕であり、その空間を他とは分かち特有の態度や社会的パターンを示すと言っている。「スラム」は「そこに住む人々を特徴づけ、彼らにスラム特有の態度や行動問題をもたらしめているのである」〔ゾーボー、同掲書〕。

19世紀末から20世紀前半のアメリカでは急激に産業化が進行し、中西部の田舎町にすぎなかったシカゴも南部のアフリカ系アメリカ人やヨーロッパからの移民が大量になだれ込み、膨張していった。パークらシカゴ学派の研究者たちは生態学的な考え方にもとづいて、都市の成長を組織化と解体のひとつの結果として考え、人間の競争と淘汰の過程を見出そうとした。都市が拡大する場合、個人や集団はその住居や職業などの属性によって空間的に配置される。この空間的セグレーションが居住者の特性を強化し、同類の諸個人を引き付け、その特質を伸ばす傾向があるとされた〔バーゼス、1972：58〕。

シカゴの空間利用を類型化したバーゼスの都市同心円化論によれば、都市はビジネス地区を中心に拡大していき、その周囲には遷移地帯、労働者居住区、富裕層の住宅地帯、通勤者地帯が立地する。「スラム」が位置するのは土地利用が推移する遷移地帯である。遷移地帯には、貧困、失業、アルコール中毒、疾病、悪徳、麻薬、墮落などの近代化＝都市化の過程で生ずる社会解体現象が集中し、「スラム」は都市の成長の過程で現れる組織化と相互補完的な、社会解体の所産として位置づけられていた〔バーゼス、同掲書：56〕。

その後、ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』〔ホワイト、2003〕やGansの『都市のむらびと』〔Gans, 1962〕によって「スラム」内部にも強固な社会組織の存在があるということが実証研究によって明らかになり、社会解体を強調するような論調に対して反証が出され、こうした流れはやがてルイスの「貧困の文化」〔ルイス、1970；1985〕論に結実していった。

パークらの人間生態学は、1920年代のシカゴという自由競争の論理に支配された一つの全体としての都市を前提としていた。だが吉原によれば、1930年代に入って高度に発達した資本主義の支配が農村にまで及ぶにつれ、地域生活の規格化・均質化が進行し、初期シカゴ学派が想定していた自己完結的な世界は終焉したという〔吉原、1984〕。そしてこの1930年代のアメリカにおける都市の状況を反映していたのが、いわば都市から農村への一元的・不可逆的な作用を前提としたワースの「生活様式としてのアーバニズム」論であった〔ワース、1978〕。吉原は

ワースや人類学者のレッドフィールドの都市論に通底する「近代化」意識が、1950年代、世界においてアメリカが経済的・軍事的に覇権を握っていた時期—フォーディズムの全盛期—に、能率的に社会や国家を統治する手段としての「下請け科学」に組み込まれていったと指摘している〔吉原、同掲書〕。興味深いのは、「スラム」が学術的概念として鍛えられ、数多くの研究が行なわれた時期がフォーディズムの時代、すなわち規律訓練の時代と照応しているということである。第二次大戦後の日本において、磯村栄一や大橋薫が「スラム研究」に取り組んでいったのもフォーディズム受容の時期であった。

この時代、「スラム住民」は従順な労働者として、近代化のプロセスに統合されるべき「他者」として把握された。このことが明瞭に現れているのは、「スラム住民」が将来的に雇用労働力として都市社会に吸収されていく可能性、言い換えるなら住民の「将来性」に基づいて分類した「希望のスラム」と「絶望のスラム」という類型とそれをめぐる議論であろう⁵。こうした分類は、「スラム住民」の「労働者」として、「国民」として、そして「市民」としての資格付けを問うものであり、それゆえまさに近代の主体の特権化し、なおかつこの主体に比して住民が「未熟」であるということをも前提としていたのである。言い換えるなら、「スラム住民」は構造の再生産に寄与する限りにおいて規律訓練にもとづき矯正される余地があったのだ。

例として、西澤による、1960年代の東京山谷において都市下層が不可視とされていくプロセスの詳細な検討を取り上げてみよう〔西澤、1995〕。山谷における「男も女も子どもも含んだ雑多な都市下層」〔西澤、同掲書：42〕は、当時の日本で成立しつつあった「組織人」と「近代家族」によって構成される〈構造〉に脅威をもたらす異文化とみなされた。その結果、〈構造〉のイデオロギーを担う行政、社会調査、警察、ボランティアから成る保護複合体によって「異」文化の「断種」を目的とした介入が開始されたのである。この介入の基本は単身男性と家族を分割し、単身男性を放置し無効化する一方で、家族を治癒し、回収していくというものであった。ここで山谷の「家族」がプログラムの対象として選別されていったのは、介入による矯正と治療によって、家父長制と性差別に基づき労働力を無償でなおかつ確実に供給する装置として経済成長の達成に貢献するという役割が期待されていたからである⁶。つまり、「スラム」は「労働者」(=国民=市民)の再生産が保証される限りにおいて、未熟ではあるが矯正可能な「将来性のある他者」として位置づけられていたのである。

おわりに

1970年代以降の世界経済の再編は、開発途上国と先進国を横断して分極化を推し進めている。その結果、かつて「中核」と呼ばれた地域の中に「周辺」が、そしてまた「周辺」の中に「中核」がというように、入れ子細工的な形態の複雑な階級関係が築き上げられている。国民国家の役割は縮小し、水、電気、公衆衛生のような人々の生命そのものの再生産に関わるようなサービスにまで市場原理が持ち込まれ、その結果、社会的再生産の単位という都市の定義はもう有効ではなくなってしまった。

このポスト・フォーディズムと呼ばれる時代の「労働」とは熟練を要さない「フレキシブルな労働」である。こうした状況下では、もはや資本はフーコーが論じた規律訓練型権力による手厚いケアによる主体形成を必要としない。西澤は、ドゥルーズの規律社会から管理社会への移行に関する議論〔ドゥルーズ、1996〕を引きながら、ポスト・フォーディズムは規律訓練を拒絶するような労働を増やし、カジュアル・ワーカーの数を増大させ、貧困を治療することの正当性を喪失させると指摘する。そして治療の必要もないとされた貧者は治安上の管理の対象として位置づけられていくのである〔西澤、2005〕。資本が限界まで〈保障〉の責任を放棄しつつあるポスト・フォーディズムの現在、労働者(=国民=市民)としての矯正が可能な「将来性のある他者」を把握するカテゴリーとしての「スラム住民」はもはや必要とされていない。最近、UN-HABITATは都市貧困に関する大規模で世界的な調査を行なっているが、興味深いのは、この調査における「スラム世帯」の定義が、経済的、社会的な要素を一切捨象し、物理的な条件に限定した非常に狭い範囲のものであったということである⁷。ここでは劣悪な居住環境に住まう諸個人の主体化(すなわち社会化=従属化)はいまや問題とされていない。「スラム」とは規律社会における「他者」を定義し、その治療と矯正を目的としてつくられた概念だったのである。

最後に、本稿で取り上げた先行研究は「中核」の社会科学に偏っており、その点で限界があるということを記しておこう。規律社会とは、かつて「中核」と呼ばれた国々が、治療と矯正に十分な経済的基盤を備えた近代国

民国家を成立させていくことによって—そして「周辺」と呼ばれた世界を侵略することによって—可能となった。したがって、規律型の「生かす権力」とは「中核」に与えられた特権であったと言うこともできよう。実際「第三世界」では、フーコー的な言説実践を通じた権力の行使ではなく体系化されたわかりやすい暴力が支配的であったという批判もある〔Tadiar, 2004〕。この問題を十分に認識した上で、今後、フィリピン社会において「スラム」という語がある程度のリアリティを持って語られた時期から、別の概念に取って代わられるまでのプロセスを詳細に検討し、なぜそれが表舞台から姿を消す運命にあったのかということについて議論していくことが必要となろう。これを単なるポリティカル・コレクトネスの問題として片付けてしまうことは避けなければならない。こうした作業を行なうことで、「スクワッター・スラムの住民」が自らを他者と定義づけていくような社会的まなざしに対し、いかに交渉し、抵抗主体を立ち上げてきたのかというテーマに焦点を当てることが可能となろう。フィリピンにおける「スラム」をめぐる諸言説に関する歴史社会的な分析と現地調査で得られたデータの検討については、課題として次稿以降に譲ることとする。

註

1. スクワッターとは英語の "squat" (しゃがみこむ、不法に占拠する) に由来する言葉であり、一般に土地取得上の法的な手続きを経ずに、また所有者とのあいだで賃貸契約をかわすことなく非合法的に無断で公有地や私有地を占拠して形成された集落を指している。フィリピンにおいて「スラム」とされるのは、多くの場合、「スクワッター」であるが、こうした集落は、まだ密集化が進んでいない都市の外縁部に位置する限りは居住環境の劣悪化が避けられる傾向にあるという〔新津 1989〕。
2. 「スクワッター」という語が含む、法律上不利になる意味合いを避けるために提案された概念〔ドワイヤー 1984〕。
3. たとえば、Laquian [1969]、Jocano [1976]、新田目 [1989]。
4. 「スクワッター」も「スラム」と同様、空間的概念である。だが「スクワッター」が法によって定義づけられた空間を物理的に占める行為を問題としているのに対して、「スラム」とはその建造環境、住民の文化や経済状態といったより幅広い側面を含んで概念化されてきた語である。また「スラム」は比較的古くからアカデミックな領域において重要概念として精緻化されてきた語であり、第二次大戦後の開発途上国の都市研究においても早くから取り入れられてきた。したがってここではまず、「スクワッター」よりも先に「スラム」を検討することが手続きと考える。
5. Laquian [1971]、Stokes [1962]、新津 [1989] など。なおこれまで「絶望のスラム」が都市中心に近いインナー・シティ・スラムへ、「希望のスラム」が都市の外縁部のスクワッター・スラムに位置する傾向が強いと指摘されてきたが〔Laquian, *ibid*〕、近年の都市空間の再編によってこうした傾向は反対になりつつあるという指摘もある〔Eckstein, 1990〕。Davis [2004] や青木 [2003] を踏まえると「スラム」の郊外化が進んでいるというのが世界的な状況のようである。
6. 日本の都市下層研究においては、单身男性労働者を中心に構成される「寄せ場」に対して、家族中心に構成され定住性の高い居住空間としての「スラム」がしばしば対置される傾向にあった〔磯村, 1966〕。「スラム」が家族中心的な居住空間として概念化されてきたということは、労働力再生産費用の外部的化によって安価な労働力の継続的に供給するプールとして「スラム」が捉えられてきたということを示唆するものである。
7. ここでは「スラム世帯」は、安全な水へのアクセス、改良された下水処理施設へのアクセス、過密でない十分な生活領域、住宅の構造的恒久性、権利の保全といった条件のうち、いずれか一つを欠いたひとつの屋根の下に暮らす個人の集団として定義される〔UN-HABITAT, *ibid* 29〕。

参考文献

- 青木秀夫 (1989) 『寄せ場労働者の生と死』明石書店。
- 青木秀夫 (2000) 「マニラの都市貧困層」『現代日本の都市下層 寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。
- 青木秀夫 (2003) 「新労務層と新貧困層—マニラを事例として」『日本寄せ場学会年報 寄せ場』No.16. れんが書房新社会。
- 新田目夏実 (1989) 「フィリピンのスラム 社会運動の可能性を秘めたスラムの一事例」(新津晃一編『アジアのスラム 発展途上国都市の研究』明石書店)。
- 磯村栄一 (1966) 「都市問題としてのスラムとドヤ」『都市問題研究』第 18 巻第 12 号。
- エンゲルス、フリードリヒ (2000) 『イギリスにおける労働者階級の実態 上下』(浜林正夫訳) 新日本出版社。
- 大橋薫・四方寿雄・大藪寿一編著 (1973) 『現代社会病理学』川島書店。
- 小関三平 (1966) 「スラム現象の基本的視点」『都市問題研究』第 18 巻第 12 号。

- カステル、マニユエル (1984)『都市問題』(山田操訳) 厚生閣。
- カステル、マニユエル (1999)『都市とグラスルーツ 都市社会運動の比較文化論』(石川淳志監訳) 法政大学出版局。
- 新津晃一 (1989)『現代アジアのスラム—発展途上国都市の研究』明石書店。
- 西澤晃彦 (1995)『隠蔽された外部—都市下層のエスノグラフィー』彩流社。
- 西澤晃彦 (2005)『貧者の領域』『現代思想 特集 フリーターとは誰か』Vol.33-1。
- ゾーボ、ハーベイ・W. (1997)『ゴールド・コーストとスラム』(吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳) ハーベスト社。
- ドゥルーズ、ジル (1996)『記号と事件—1972—1990年の対話』(宮林 寛訳) 河出書房新社。
- ドワイヤー、D. J. (1984)『第三世界の都市と住宅』(金坂清則訳) 大明堂。
- バーゼス、E.W. (1972)「2. 都市の発展—調査計画序論」(パーク、ロバート・E. 他 大道安次郎・倉田和四生訳 1972『都市』鹿島出版会)。
- 濱嶋朗・竹内都郎・石川晃弘編 (1992)『社会学小辞典』有斐閣。
- フーコー、ミシェル (1977)『監獄の誕生—監視と処罰—』(田村俊訳) 新潮社。
- 藤田弘夫 (1991)『都市と権力 飢餓と飽食の歴史社会学』創文社。
- 藤田弘夫 (1993)『都市の論理 権力はなぜ都市を必要とするか』中公新書。
- ホワイト、ウィリアム・F. 2000『ストリート・コーナー・ソサエティ』(奥田道大・有里典三訳) 有斐閣。
- 吉原直樹 (1984)「第三章 都鄙連続体説と比較都市社会学の間」『都市社会学の基本問題』青木書店。
- ルイス、オスカー (1970)『ラ・ビエダープエルトリコ—家族の物語』(行方昭夫、上島健吉訳) みすず書房。
- ルイス、オスカー (1985)『貧困の文化—メキシコの<5つの家族>』(高山智博・染谷臣道・宮本勝訳) ちくま学芸文庫。
- ワース、ルイス (1978)「生活様式としてのアーバニズム」(パーソンズほか、鈴木広訳 1978『都市化の社会学』誠信書房)。
- ワース、ルイス (1993)『ユダヤ人問題の原型・ゲッター』(今野敏彦訳) 明石書店。
- Berner, E. (1998) *Defending a Place in the City Localities and the struggle for urban land in Metro Manila* Ateneo de Manila University Press
- Eckstein, S. (1990) "Urbanization Revisited: Inner-City Slum of Hope and Squatter Settlement of Despair", *World Development*, Vol.18, No.2.
- Escobar, A. (1997) *Encountering Development*, Princeton Paperbacks
- Ford, J., et al. (1936) *Slums and Housing with special reference to New York City: History · Conditions · Policy*, Harvard University Press.
- Davis, M. (2004) "Planet of Slums", *New Left Review* Vol. 26.
- Gans, H. J. (1962) *The Urban Villagers*, Free Press.
- Jocano, L. (1976) *Slum as a way of life*, New Day Publishers.
- Laquian, A. (1969) *Slums are for people*, East-West Center Press
- Laquian, A. (1971) "Slums and Squatters in South and South East Asia" in *Urbanization and national development*, edited by Leo Jakobson and Ved Prakash. Associate editor: Sheilah Orloff Jakobson., Sage Publication.
- Karaos, A. M. A. (1995) *Manila's Urban Poor Movement The Construction of Collective Identities*, Ph.D Dissertation of New School of Social research.
- Murray, J.A.H., Simpson, J., Weiner, E. ed. (1989) *The Oxford English Dictionary*, Clarendon Press.
- Naerssen, Ton van. (2003) "Globalization and urban Social Action in Metro Manila", *Philippine Studies*, Vol.51, No.3
- Stokes, C. (1962) "A theory of Slums" *Land Economics*, Vol.38, No.3.
- Tadiar, Neferti Xina M. (2004) *Fantasy-Production Sexual economies and other Philippine consequences for the new world order*, Ateneo de Manila University Press.
- UN-HABITAT (2003) *Slum of the World: The face of urban poverty in the new millennium?* (<http://www.unhabitat.org/publication/slumreport.pdf>), アクセス日: 2004年2月.
- Ward, D. (1989) *Poverty, ethnicity, and the American city, 1840-1925 Changing conceptions of the slums and the ghetto*, Cambridge University Press.

(2006年1月10日受理)